

旭川市博物館の民族資料

旭川市博物館

旭川市博物館が所蔵する民族資料の多くは、河野常吉・広道・本道氏が三代にわたって収集したものであり、河野コレクションとして知られています。

大半の資料の収集にあたった広道氏は、北海道史研究に大きな足跡を残す常吉氏の次男として1905年（明治38）に札幌市で生まれました。北海道教育大学札幌分校教授をつとめながら、北海道考古学やアイヌ民族の研究で指導的な役割を果たしましたが、1963年（昭和38）に亡くなりました。その収集資料は、アイヌ関係資料のほか、サハリン、大陸、台湾の民族資料を含んでいます。

アイヌ民族資料は、収集地が全道におよび、またその内容も祭具、生活用具、狩猟採集具など多岐にわたっています。

ニヴフ（ギリヤーク）やウィルタ（オロツコ）などサハリンの先住民族資料は、広道氏が1932（昭和3）年、37年、38年、40年に実施したサハリン（樺太）での昆虫採集調査の際に収集したものです。

大陸のオロチョンの資料は、広道氏が1944年（昭和19年）に当時の満州国総務庁から大興安嶺総合調査学術班長に委嘱され、その調査の際に収集したものです。

新たな文化伝承の息吹

旭川市博物館



「歌詞が作れるようにアイヌ語を学びたい」。
マレウレウのメンバー。
川村カネトアイヌ記念館のチセ(張)の前で。

透き通った

声が届まりかえった
空間に響く。一人の

手が中央に置かれたシントコ(行
器)の蓋を叩き、リズムを作る。

数小節の間をおき、先の声を連う
声が届きかける。互いが追い、重
なり、離れながら、歌声がシント

コの上を回っていく。声が力強く
なっていくと、歌の輪は大きくな

り、歌声は空間全体に広がる。や
がて、聞き手はその輪に囚われる。

神聖さと危うい恍惚を同時に感じ
る歌声だ。マレウレウ。蝶の名を

冠したグループはアイヌの伝統的
なウポボ(座り歌)を歌っている。

その中でも彼女たちが注目してい
るのがウコウクウポボ(輪唱)だ。

「昔の録音を聞いたら、とてもお
婆ちゃんたちにはかなわない」と、

メンバーのヒサエさんは「もう」そ
れぞれがアイヌの節を持っている。

歌い手は多く、豊かな節を持つほ
ど良い。祈っているように物語を語っ

ていても、節があれば歌に聞こえ
る。節はアイヌの生活の中で増や

していくもの。節はお守りのよう
なものなんです」

近年では、若い世代を中心にア

『真の王国』(ANAグループ機内誌)
2008年6月号

アイヌ文化、伝統を積極的に学び、

取り組む人々が増えているという。

「いつか、自分の節を持って歌い

たい。歌と共に、アイヌ語をもっ

と理解したい。生活と共に言葉

を学ぶことによって、さらに歌の理

解が深まっていく。マイマイさ

んはい。

アイヌ文化は博物館の中に収ま

るものではない。時は、いろり

の中、埋み火のように小さくはな

ってしまっただけで、火は途絶え

ずに残っている。彼女たちの歌う

ウポボのように、次を歌う世代も

現れ始めている。

アイヌの世界観

クマとオルゴールメリー

旭川市博物館

アイヌの人びとのカムイ（神）

アイヌの人びとにとってカムイ（神）とは、「人間にない力をもったものすべて」を指します。動物や植物といった生き物だけでなく、山や川、風や太陽、さらには病気や飢饉のような災いさえも、精神をもつカムイと考えられています。かれらはそれぞれの「カムイの国」に人間の姿をして住んでいますが、鳥や獣といったよそいきの衣装を身につけて「人間の国」にやってきます。人間はカムイがいないと毛皮や肉を手に入れることができませんが、カムイもまた人間がいないと酒や幣といった宝やごちそうを手に入れることができません。カムイは、人間からこうしたものを捧げてもらうほど豊かな生活を送り、カムイの仲間でも株を上げることができるので、これらのもので自分を丁寧に祀ってくれる人間のところにやってくるのです（中川 1997）。

カムイの魂を送る

そのためアイヌの人びとは、狩りを獲物を「殺す」「捕る」ものではなく、もてなしを受けたいため人前に姿をあらわすカムイを「受け取りに行く」「迎えに行く」ものと考えます。大事な神ですから、訪問してくれたことに対する感謝を捧げ、供物をささげて魂を神の国に戻してやります。この儀式をアイヌ語でイオマンテ（カムイホプニレ）といいます（アイヌ民族博物館編 1993）。

魂を神の国に送り届ける儀礼は動物だけに限りません。祭りや生活の道具などの「もの」が役割を終えたとき、その「もの」の魂もまた、儀式をおこなって神の国に送り返しました。このような「もの」の送りをイワクテといいます。小動物や鳥などの送りもイワクテという場合があります（宇田川 1980）。

送られたクマとオルゴールメリー

昭和 43(1968)年、嵐山の岩陰で確認された現代の上川アイヌの送り場には、花矢や家紋を刻んだ椀といったアイヌの伝統的な道具類のほか、酒ビンや缶（1961 年製）、クマ・イタチ・リス・タヌキ・ウサギなどの鳥獣骨が入ったビニール袋4点とともに、乳児用のオルゴールメリーの部品が置かれていました。思い出の多いオモチャもまた神の国に送り返されていたのでしょうか。いずれにしても、この送り場は、アイヌの人びとの世界観が現代にも脈々と受け継がれていることを物語っています。上川アイヌは、嵐山のこのような送り場を「イワクテ」の跡と呼んでいました（故杉村満さんから聞き取り）。

展示は、この嵐山の送り場に着想を得て、イオマンテのクマとオルゴールメリーを配し、アイヌの人びとの世界観・生命に対する想いを象徴的に演出しました（展示物はいずれも嵐山の出土資料ではありません）。展示のタイトルは、現代の私たちの世界観からは失われかけている「もの」に対する感謝を強調するため、また嵐山のイワクテの跡にちなむものであることから、「イワクテ」としました。

参考文献

- アイヌ民族博物館編 1993『アイヌ文化の基礎知識』草風館
- 宇田川洋 1980『アイヌ考古学』教育社歴史新書
- 中川 裕 1997『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー

テケウクテおばあさんの歯と イワクテ

旭川市博物館

ある上川アイヌの方から伺ったお話です。

1945年に80代で亡くなったテケウクテというおばあさんは、4人の娘を授かり、家族と同居していました。テケウクテおばあさんは、健康で病気がひとつせず、歯もすべて揃っていたといえます。

娘たちは「フチ（おばあさんに対する尊称）も高齢だから、いつにながあってもおかしくない。その時がきても困らないように、フチの前歯を一本抜いておかなければ、迷ってあの世に行けないのではないか」と案じていましたが、ある日、前歯が一本抜けたので安堵したそうです。

さて、テケウクテの娘たちは、母の成仏を願ってなぜ歯を抜こうと考えたのでしょうか？

アイヌの人びとは、精魂こめてつくりだしたモノには良い魂が宿ると考えています。やがて役割を終えた器物などは、イワクテ（使えなくなった道具などの魂をカムイの国へ送りかえすこと）の際に、どこか一箇所にキズをつけることで、そこから魂が解き放たれ、カムイの世界に還ることができるのです。

歯を一本抜かなければ成仏できないというこの話の背景には、イワクテのキズと同様に、そこから魂を開放するという意味があったのかもしれない。

前歯が欠けたテケウクテの身体を抜け出した魂は、やがてシンリウタリオシニ モシリ（先祖が安らぐ世界）へたどりつき、平穏に暮らせるだろう、と参列者は口々に話していたといえます。

上川アイヌと漁撈

旭川市博物館

上川アイヌは一戸あたり数千尾ものサケを捕獲して干鮭(からさけ)に加工し、翌春に本州向けの交易品として出荷していた。そのためかれらの集落は、サケが遡上する石狩川と忠別川に面した低い段丘面上にあり、つねに洪水の危機にさらされていた。実際、旭川市発行の「洪水ハザードマップ」をみると、そこに示された危険地帯はアイヌの集落が立地する段丘面とぴったり重なっている。

このような近世の「漁民」の集落に対して、縄文時代の集落は、氾濫危険地帯を除くすべての段丘面や山地に分布している。この立地の多様性は、上川の縄文人が多様な資源を多様な形で利用していたことを示すものであり、そこにはサケ漁への特化をうかがうことはできない。かれらは「漁民」ではなく「狩猟採集民」であったといえよう。

氾濫地帯に「漁村」が成立したのは9世紀末の擦文時代中頃のことであり、交易品としてのサケの出荷の始まりはここまでさかのぼる可能性が大きい。

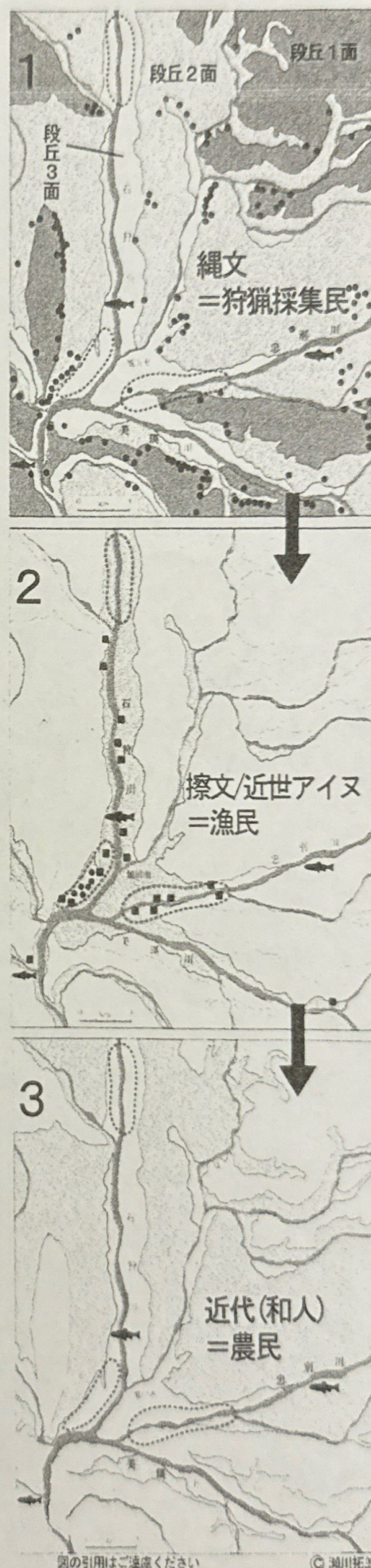
明治20年代以降、上川には旭川・永山・当麻の各屯田兵村や陸軍第七師団の設置など、和人の入植が相次いだ。これらの大規模開発はすべて段丘2面でおこなわれたものであり、縄文・擦文・アイヌのいずれの集落立地とも異なっている。その集落立地は「農民」としての選択だったといえよう。

それまでアイヌの集落があった段丘3面には、アイヌの給与地が設定されたほか、遊郭・安宿などが建ち並び、馬車追いが住みつくなど、美しく条里区画された市街地とは異なる世界が展開することになった。

右図 上川における各時代の集落と立地する段丘面の変遷

灰色で示したのは集落が立地する段丘面

- 1 縄文時代(河岸段丘1面および2面)
- 2 擦文時代および近世アイヌ(河岸段丘3面)
 - 近世アイヌの集落
 - 擦文時代の集落
- 3 近代(河岸段丘2面)



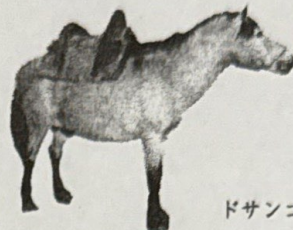
図の引用にご遠慮ください

© 旭川市

上川アイヌと馬

旭川市博物館

明治24(1891)年、永山村に400戸の屯田兵が入植し、上川の本格的な開発がはじまりました。しかし、それはまだ広大な盆地のごく一部にすぎず、あたりには天を突く密林や草原がどこまでも広がっていました。



ドサンコ (複製)

翌年の5月28日から3日間の予定で、忠別川沿岸の測量調査をおこなっていた永山屯田の南部軍曹と奥野次郎右衛門氏ら3名は、無数の蹄の跡がのこる踏み分け道を発見しました。たどってゆくと「当時としては割合に大きい四尺四寸くらいの青毛の馬」が突然あらわれ、驚いた3人はこれに発砲、付近のカヤ原に散っていた馬の群れが一斉に逃げだしました。

事件の3ヶ月後、この話を聞きつけた空知太(現滝川市)の旅館「大阪屋」主人は、日高から来ていた数人の馬喰(馬の売り買いをする商人)をともなって上川に入り、忠別川沿岸で親馬22頭、仔馬5頭、計27頭の生捕りに成功します。

奥野氏は、日高から富良野を経て入り込んだ馬が、早くから上川で自然に増えたものではないかと推測しています。それが事実かどうか明らかではありませんが、上川で馬が野生化していたことは確かなようです。

上川アイヌが馬を飼っていたとの記録はありませんし、そもそも本来北海道に馬は生息していませんでした。しかし、中世には道南に進出した和人が馬を飼っており、近世には道央部で馬が飼育されていたことも考古学的に確認されています。

この近世の馬については、アイヌが柵で囲った牧場で馬を飼っていた可能性も指摘されているので、近世前半にはアイヌが馬産に従事する状況は広くみられたかもしれません。

北海道の在来馬をめぐる研究はまだ始まったばかりです。今後の発掘調査の成果に期待したいとおもいます。



馬を駆るアイヌ
(『松本吉兵衛絵入紀行』1859)

参考文献

- 東旭川町役場編 1963『東旭川町史』
- 鈴木 信 2002「擦文-アイヌ文化期の馬」
『北海道立埋蔵文化財センター年報』3
- 田村俊之 2004「道央部のアイヌ文化」
『新北海道の古代3』北海道新聞社
- 北海道開拓記念館 2005『北海道の馬文化』
- 宮上 博 2006「日本列島の馬とドサンコの起源」『Hippopfile』23

(図板は北海道開拓記念館 2005 より引用)

上川アイヌと和風住宅

旭川市博物館

私が住んでいた給与住宅は、桁屋根で外壁は下見板張り、それも節穴だらけで時にはこの節穴に鳥が巣を作ることもあるほどでした。中の板は縦張りですが、板と板の間は反っていて、子供の指ならそっくり入るほどですから、隙間風を防ぐための新聞紙を、一面にべったりと張っていました。

…茶の間の真ん中には大きな炉があり、薪ストーブが置かれていましたが、煙突が真っ直ぐ屋根上にでていましたし、何よりも天井板を張っていないのですから、熱効率が悪くストーブからの直接の暖かさだけで熱をとるのです。

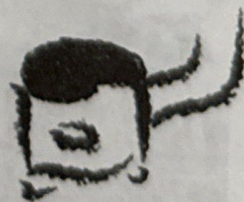
寒中はストーブに向かって座ると顔が焦げるほど熱いのに、背中の方は隙間風でとても寒かったものでした。吹雪の日などは窓や壁の隙間から粉雪が吹き込みそれがストーブの上で「ジュッシュ」鳴ったものです。だから皆、厚着をして着ぶくれしていましたし、子供らは背中に野兎やチンチラ兎の毛皮を内側に縫いつけたのを着ていました。

伯母テキシランの家は、昔ながらの笹小屋で、入口はカヤのすだれを下げてただけであり、暖房は囲炉裏の焚き火でしたが、この方がはるかに暖かったものでした。

記録によれば「給与住宅は寒いので、これを物置きとし、住む家は再度笹小屋を建てている者もいた」とありますが、たしかに内地式のバラックのような家では厳寒の暮らしには不向きですが、理由はそれだけでなく、アイヌの神々の中でも最も大切な火の神（アペフチ）をストーブの中に閉じこめなければならないので、当時のアイヌにとってこれほど困ったことはないわけで、古来の生活を守りたい頑固な人が、再び笹小屋を建てて暮らしたともいえるでしょう。

私の伯母テキシランはその最たる者だったらしく、酒はもちろんのこと日常の食事にしても、ご飯をはじめ、魚や野菜などを（火の神に捧げるため）最初に焚き火の中に入れてからでなければ、決して食べませんでした。

私の母も「火が見えないのは寂しい、といってストーブの前蓋を開き、部屋中を煙りだらけにして中の火をのぞいて満足していたフチ（おばあさん）がいた」と話していましたが、今の私には胸が痛くなるほど、この人たちの気持ちが伝わってくるのです。



上川アイヌのチセ

旭川市博物館

私の祖父川村モノクテは、近文アイヌのコタンコロクル（村長）で、私が生まれた明治三〇年には、いまの旭川市川端町の石狩川のすぐそばに、ササで作ったアイヌの大きな家を立てて住んでいました。

…エカシ（おじいさん）の家が大きく立派だったことと言ったら、子供心に、こんなに大きな家をどうやって作るのだろう、と不思議に思ったほどでした。家の南側にある戸口を入ると広い土間があり、その右手の壁に部屋へ通する戸口があります。

ここに立つと目の前に大きなアペ（炉）が、正面にはロルンプヤラ（神窓）が見えます。家中の床、壁にはフチ（おばあさん）と母が編んだきれいなチタラベ（ござ）がすき間なく張ってありました。

ロルンプヤラは、神から授けられた肉を運び込んだり、儀式の祭具を出し入れするための神窓で、窓の左手の壁には、守り神や祭事の用具、宝物、狩猟の道具類などを納めたイヨイキリ（神棚）があります。

村の大事な儀式は、このロルンプヤラとイヨイキリの前で行いました。正装した四、五〇人の男たちが、ロルンプヤラの前に、横二列に、ごちそうを間にはさんで向かい合って座ります。儀式のあとは、男も女も炉のぐりに座り、酒を飲みながら夜ふけまで歌ったり踊ったり、炉ぶちをたたいてユーカラをしたり、とてもにぎやかでした。

父が猟で獲物を捕った時にも村中の人々が家に来ました。父は狩猟の名人で、よくクマを捕りましたが、必ず、村の人たちにクマの肉を炊いて食べさせたのです。いつも、まず最初に、体の弱い人と老人を呼びました。

砂沢クラ 1983『ク スクップ オルシペ 私の一代の話』北海道新聞社



近文にあったチセ

アイヌと大モンゴルの戦い

旭川市博物館

10世紀以降、北海道のアイヌの人びとは、サハリンから南下して北海道の北半分を占めていたオホーツク文化人を排除・同化しながら全道に進出します。さらに11世紀前半にはサハリン南部、13世紀以降は千島へも進出し、15世紀にはカムチャツカ半島まで活動圏を拡大していました（下図）。

古代から中世のアイヌについて記した日本側の史料はほとんどありませんが、中国側の史料である『元史』などには、次々と活動圏を拡大してゆく13世紀から14世紀当時のアイヌの生々しい姿が記録されています。以下にそのあらましをご紹介します。

モンゴル帝国（元）は、13世紀の半ばころまでには、その勢力をアムール川（黒竜江）下流域まで伸ばし、河口部近くに東征元帥府を設置していました。さらにその政治的影響は、サハリンにまで及んでいました。

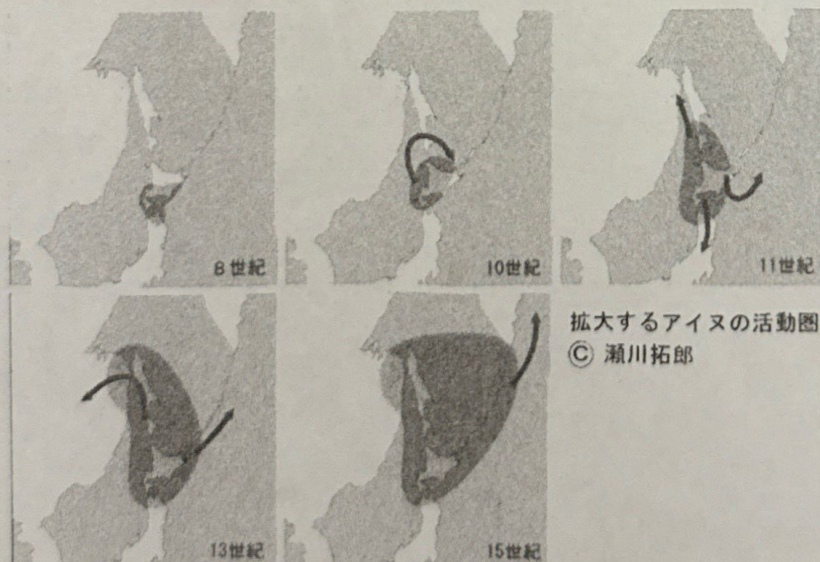
そのようななか1264年、元に服属していたサハリン先住民のギレミ（ニブフ）から、クイ（アイヌ）が毎年宗谷海峡を渡って自分たちの領域を侵すとの訴えがおこります。そこで元はときに兵1万人・船1千艘を派遣してアイヌを攻撃し、かれらの侵入を排除していました。一般に兵1万人は記録上のことだけで、実際には数千人規模のことでも多かったようですが、それでもこの地域においては大軍※であったといえます。

※ちなみに「元寇」といわれる文永の役に動員された元軍は兵3万余と船900隻、弘安の役では兵約14万人と船4千隻余。

アイヌはサハリンに侵入するだけでなく、大陸に渡って村々を襲い、略奪をおこなって元軍の手を焼かせていましたが、1308年には毎年毛皮を貢納することを約束し、元に降伏しました。

文献

中村和之1999「北の『倭寇的』状況とその拡大」『北の内海世界』山川出版社



永寧寺碑文とアイヌ

明の王朝は、元が東征元帥府を置いたアムール川河口のティルに奴児干都司（ヌルガンとし）という役所を設置し、引き続きこの地域を支配しました。この奴児干都司設置の経緯を記してティルに建立された「勅修奴児干永寧寺記」（1413年）にはサハリンのアイヌなどの先住民が貢ぎ物として特産物を携え、この地にやってきていたことが記されています。

菊池俊彦・中村和之編2008『中世の北東アジアとアイヌ』高志書院

セレマク(陰)の思想

旭川市博物館

さてアイヌが通常座臥する「うしろ」には、所謂 iyoikir (宝壇) があって、夥しい宝器や祭器が積み並べられている。宝器や祭器の類を自己の背後に積み上げる気持ちは、謂わば「うしろだて」を作る気持ちである。…「うしろだて」となる宝器や祭器の一つ一つには精霊

(ramachi) が有って、それらの精霊が、持主のアイヌの後盾となり、常に背後から見守ってくれれるものと、アイヌは信じている。…アイヌが宝器を欲しがり、またさまざまな祭器を蒐めて

は、背後に飾り立てるのは、決して貪欲な心からではなく、それらのものを多く蒐めれば蒐める程、自分を守ってくれる精霊が豊富になり、従って自分の「運が強くなる」と考えるからである。…アイヌの首長の義務として「宝物を多く蒐めること」「故事来歴に通ずること」「神々への祭祀を怠らぬこと」等が考へられるのも、実はこれに依って自己及び自己の周囲の人びとの「陰を強くする」ためなのである。



知里真志保 1952「アイヌ民族研究資料(第2)」『北方文化研究』第7輯



宝の前に座すアイヌの酋長夫妻